

格助詞指導法の開発のために

矢 沢 国 光 （ろう・難聴教育研究会）

格助詞の、コア・イメージを基礎とした指導法は、ようやく外国人のための日本語指導法として、試行され始めたところです。聴覚障害児が、手話コミュニケーションを第一言語としてその上に日本語を習得する場合も、聴覚口話法を基本として指文字・手話等の視覚的方法で補いつつ日本語を習得する場合も、こうしたコア・イメージ法は、有望とみられます。

同時に、日本語格助詞そのものの言語学的研究は、まだまだ始まったばかりです。格助詞のコア・イメージをどう描くのか、その適用範囲はどこまでか、という問題も、未解決です。

ここでは、コア・イメージによる格助詞指導法の到達点を確認し、聴覚障害児（幼児から中高生まで）にどう使えるか、検討します。

〔1〕さまざまな格助詞指導法

（1）意味ごとに教える指導法

外国人の日本語学習者に対する従来の指導法は、例えば格助詞「～で」のさまざまな意味を、一つずつ教えていく、というものでした。

独立行政法人 国際交流基金日本語事業部がインターネット上に設けている「みんなの教材サイト」では、

Nで （動詞）

について、次の四つのカテゴリーに分けて、教材が作られています。

1)で（場所）

わたしはレストランで 昼ごはんを食べます。

9時から3時まで学校で 授業があります。

大阪で 地震がありました。

2) で（基準/範囲）

（買い物の場面で） A: チョコレートケーキを三つとチーズケーキを五つお願いします。 B: はい。全部で2800円です。

（買い物の場面で） A: いくらですか。 B: 三つで500円です。

3)で（手段/材料）

先生は赤いチョークで 答えを書きました。

A: まりさんは何で 学校へ来ますか。 B: 電車で 来ます。

A: 先生、このことばの意味は何ですか。 B: 辞書で調べてください。

コンピュータで 絵をかくことができます。

A: おにぎりは はしで食べますか。 B: いいえ。手で 食べます。

A: その荷物は 何で 送りますか。 B: 航空便で 送ります。

4) で (原因/理由)

小林さんは風邪で テニスができません。

田中さんは病気で 学校を休みました。

電車が雪で 止まりました。

◇ろう学校での指導事例

2007年8月の埼玉全国討論集会分科会で、宮城ろう学校小学部教員・大割恵さんの、4年生を対象とする助詞指導の実践報告がありました。

大割さんの、格助詞「で」の指導は、「意味ごとに教える」方法です。

道具→場所→乗り物→言語→理由→限度・期限→範囲、の順番に教えたということです。

指導前には、児童3名のうち、一人は、場所、手段、範囲、限度、理由原因のいずれも、正しく使用できていたが、あとの二人は、場所、理由原因の「で」は正しいが、他の意味(手段、範囲、限度)については、誤用していました。

指導した結果は、

1) 「地下鉄() 帰る」は、「乗り物だからデ」、「家() 遊ぶ」は「場所だからデ」と、子どもから言うようになった、

2) 「次は「に」のルールをする?」と、次の学習を期待するようにもなった、
ということです。

4年生くらいになると、こうした「意味ごとの指導」が可能になることがわかります。

こうした指導法は、「場所」とか「道具」とかの意味・用法を言葉で説明して理解できる子ども(小学校高学年以上?)に対しては、可能ですが、幼児には、無理です。

それに、「デ」の意味をすべてひろい出して教える、というのは、外国人の日本語学習者に対する指導の経験からも、学習者の負担が大きく、かつ、抜け落ちることが多いといわれます。

そこで考え出されたのが次の「コア・イメージによる指導法」です。

(2) コア・イメージによる指導法

格助詞のコア・イメージの図(ページ)を示して、説明し、さまざまな用法を一つのコア・イメージの拡張として理解させる方法です。小学校高学年以上には、有効でしょう。

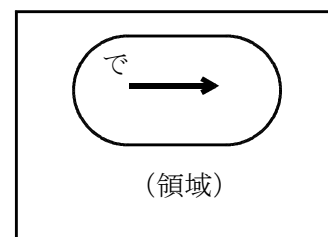
◇格助詞「〜で」のコア・イメージ

前項の、「〜で」の四つの意味を、たった一つの中心的なコア・イメージによって統一的に捉えるには、どうしたらよいでしょうか。

まず、四つの意味、つまり、基準/範囲、場所、手段/材料、原因/理由のうち、どれが中心的な意味だろうか。

それを考えるとき、「習得の順序」が参考になります。前号に書いた岩城先生の調査では、

場所→様態 [基準] (ヒトリデ、イッペンデ) →道具 (テデ モツ) →時間 (アトデ スル)



*「原因」は、資料に出てこない。

となっています。

また、別の、日本語学習者（聞こえる外国人）の調査では、

場所→道具→様態 [基準] →原因→時間

という順序だそうです。

場所が最初、というのは一致しています。「～で」のコア・イメージのプロトタイプ（典型、代表的なタイプ）として、「場所」を設定することの妥当性が、習得の順序からも、言えます。

「～で」のイメージとして、右図のようなものが提案されています [杉村泰、イメージで教える日本語の格助詞] (名古屋大学、言語文化論集 Vol.27, No.2(20060000) インタネットで読める)。

・助詞「～で」のコア・イメージは、「背景・領域」とみる。

・そのコア・イメージの典型（プロトタイプ）は、空間的な「場所」である。

「レストランで 昼ごはんを食べます。」

「デパートで 買います。」

「学校のテニスコートで します。」

・空間的な場所から、その他のさまざまな背景へと拡張する。あることが行われる際の**手段・道具**も、その行為の**手段・方法**がどのように限定されているか、という背景と考えられる。

赤いチョークで 答えを書きました。:

電車で 来ます。

辞書で 調べてください。

コンピュータで 絵をかくことができます。

おにぎりは 手で 食べます。

その荷物は: 航空便で 送ります。

・行動の**関与者**がどのように限定されているか、という背景。

一人で 留守番する。家族で 旅行する。

・事物の生起する**事情・原因・理由**という背景。

かぜで 休む。

・**時間的な限定**

話し合いは たったの五分で 終わった。

このように、「～で」の意味を、「領域（背景）」という一つのイメージから拡張したものとして、捉えるのです。

ただ、後述するように、格助詞「で」の用法をすべてこのコア・イメージに帰着させることができるかどうか、疑問が残ります。今後の課題です。

(3) 国語科の指導

国語教材等の文章において、格助詞が異なれば意味が異なることを学習するのは、従来の国語科の読解指導にもあります。これも、コアイメージを前提に指導することによって、「意味の違い」がより明確に、わかりやすくなることが期待できます。

◇ニとデ

例えば、次の歌の、「山田に」は、どうして「山田で」ではなく「山田に」となっているのか。

卯の花の、匂う垣根に

時鳥（ほととぎす）、早も来鳴きて

忍音（しのびね）もらす、夏は来ぬ

さみだれの、そそぐ山田に

早乙女（さおとめ）が、裳裾（もすそ）ぬらして

玉苗（たまなえ）植うる、夏は来ぬ

——「夏は来ぬ」佐々木信綱作詞・小山作之助作曲

◇「に」と「へ」

到達点、目的地を表している場合「へ」と「に」を置き換えても、日本語としては間違っていないことがよくあります。しかし、「形がちがえば、意味もちがう」のです。

青い目をした お人形は

アメリカ生まれの セルロイド

日本の港へ ついたとき

一杯涙を うかべてた

——青い目の人形（野口雨情）

※「へ」は向かう方向を表す。アメリカから日本の港へ向かうお人形の立場が、「～へ」で表現されている。「日本の港に ついたとき」としたら、どうなるだろうか？

◇「で」と「に」のちがい

春がきた 春がきた

どこに きた

山にきた 里にきた

野にもきた

花が さく 花がさく

どこに さく

山にさく 里にさく

野にも さく

鳥がなく 鳥がなく

どこで なく

山でなく 里でなく

野でも なく

——春が来た（高野辰之）

※「～でなく」は「～になく」でも、日本語としては、間違えではない。「に」は、一点で密着したイメージになる。鳥が飛びまわりながら鳴くイメージは、広がりのある背景を表す「で」によって、表現される。

(4) コアイメージそれ自体の形成を促す方法

考えてみれば、日本語の母語話者は、とくに教わったわけでもないのに、助詞を自然に使いこなすようになります。

「彼はアメリカの有名大学（ ） 出た。」

の（ ）に「を」か「から」を入れなさい、という設問に対して、日本語母語話者は、全員が「を」を記入したのに対して、日本語学習者（中国や台湾の大学生）の多くは（大学によっては七割以上が）「から」と記入したそうです。

日本語話者は、理屈はわからなくても、「大学を出る」と「大学から出る」を使い分けることができます。【註】

理屈がわからなくても、使い分けられるのは、それぞれの格助詞の意味が頭の中に、一つのイメージとなって形成されているからだ、と考えられます。言い換えれば、「～で」の雑多な用例（場所、手段、原因、……）を記憶しているのではなく、「～で」をたった一つのイメージとして、もっている、と考えるのです。

そのたった一つのイメージのことを「コア・イメージ」と呼びます。「～で」の場合は、図のような「領域」というのがコア・イメージです。そして、領域のプロトタイプ（もっとも原初的、典型的、それらしいもの）は、事物の生起する「場所」です。領域は、場所から、事物の生起するさまざまな背景—手段、原因など——へと拡張されているのです。この拡張は、人間という生物種に共有されているある種の認知作用によるものと考えられます。

ですから、格助詞を習得するもっともよい方法は、母語話者と同じコア・イメージを、頭の中に形成することです。

どうやって形成するか。

母語話者は、幼児からの、周囲との無意識の日本語コミュニケーションによって、獲得します。

聴覚障害児にも、これと同じ体験をさせれば、獲得するはずです。

といっても、耳からの入力に制約がありますから、「自然に」は形成されません。

聴覚口語法、指文字、文字等の補助を得て、意図的に、効率的に、入力する必要があります。このことについては、あとでまた述べます。

[2] 格助詞のコアイメージ

(1) コアイメージの提案

日本語格助詞としては、

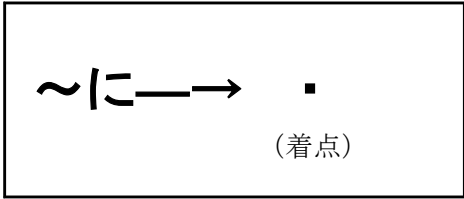
が、を、に、で、へ、と、から、まで、より

がありますが、杉村泰、「イメージで教える日本語の格助詞」（前掲）には、

に、で、へ、と、から、まで

の6つの格助詞のイメージが提案されている。それを参考に、格助詞の意味とイメージを、まず見ておきます。

(1) 格助詞「に」のコア

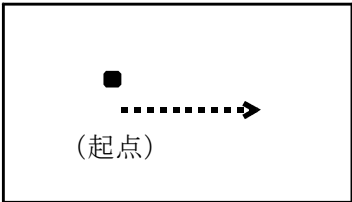


格助詞「に」のコアとしては、下図のようなものが提案されています。これは、「～に」の意味が、「一方向性をもった動きの結果として、密着する対象（点）であることを示す」ものと考えます。

空間的移動の着点「～に」を使って、その他の事物の移動の着点を表す例

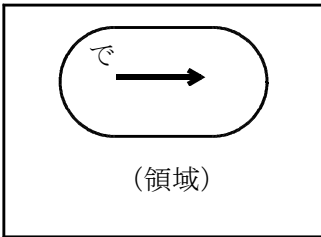
文 例	意味の拡張	「～に」の意味	コア／派生
学校に 行く。 ゴミを川に 捨てるな	空間的移動の着点 物を空間的に移動させる着点	着点	コア的意味
社長に 会う。	働きかけの着点	働きかけの対象	派生的意味
雨に なる	変化の着点	変化の結果	
買い物に 行く	行為・気持ちの着点	目的	
母の実家は、名古屋 <u>に</u> ある。	存在の着点	存在地点	
8時に <u>家</u> を出る。	時刻指定の着点	時刻	
頭痛に 苦しむ。	原因究明の着点	原因究明先	
姉は父 <u>に</u> <u>そ</u> っくりだ。	比較の対象の着点	比較の対象先	
弟に <u>手</u> 伝わせた。	働きかけの着点	働きかけの対象	
四年に <u>一</u> 度の選挙。	基準を求める着点	基準量	
私に <u>本</u> を買ってくれた。	授受の着点	受益者	
友だち <u>に</u> <u>本</u> を買ってもらおう。	授受を働きかける着点	授与者	
課題 <u>に</u> <u>取</u> り組む。	行為の向かう着点	行為の対象	
国語 <u>に</u> 算数 <u>に</u> 社会、……。	追加する着点	追加する先	

(2) 格助詞「から」のイメージ



文 例	意味の拡張	「～で」の意味	コア／派生
アメリカ <u>から</u> 来た	空間的な起点	起点	コア的意味
社長 <u>から</u> 社員に説明する。	動作の起点	動作主	派生的意味
大きい子ども <u>から</u> 走った。	順番の起点	順序	
朝6時 <u>から</u> ずっと待っていた。	時間の起点	時間の始点	
友だち <u>から</u> 本を もらう。	やりもらいの起点	授与者	
先生 <u>から</u> 話してもらおう方がよい。	同上	同上	
わが家は学校 <u>から</u> 近い	距離の起点	距離の始点	
チーズは牛乳 <u>から</u> 作ります。	製品の起点	原材料	
生活苦 <u>から</u> 夜逃げした。	事象の起点	原因	

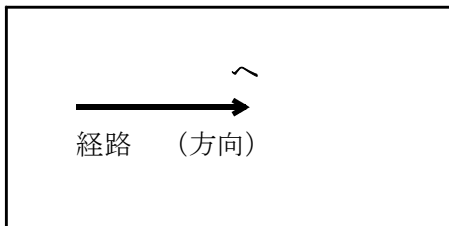
(3) 格助詞「で」のイメージ



場所「～で」を使って、その他の事物の領域を表す例

文 例	意味の拡張	「～で」の意味	コア／派生
ホールで お集まりをした。	空間的な領域	場所	コアの意味
はさみで 切る。地下鉄で 行く。	動作の背景領域	手段・道具	派生的意味
一人で 留守番する。家族で 旅行する。	行動の単位領域	基準	
かぜで 休む。	事物の生起する背景領域	原因	
話し合いは 十分で 終わった。	時間的な領域	時間	

(4) 格助詞「へ」のイメージ

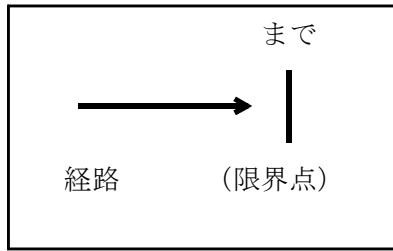


場所「～へ」を使って、方向を表す例

文 例	比喩の起点／目標 ^{*1}	「～へ」の意味	コア／派生
東京へ行く。図書館へ行く。	物の移動する方向・着点	移動の着点	コアの意味
北へ 向かう。	物の向かう着点のない方向	方向	派生的意味
先生へ 手紙を出す。母へ 伝えたい。	気持ちの向かう方向	働きかける相手先	
近代社会へ 成長する。	変化の向かう方向	変化の結果	

(5) 格助詞「～まで」のイメージ

*1 A（たとえば時間的な経過）をB（ここでは、空間的な経過）の比喩で表すことを、AからBへの写像と捉えて、Aを比喩の「起点」、Bを比喩の「目標」ということがある。

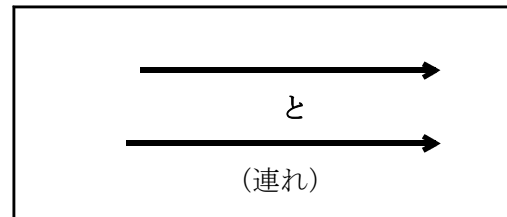
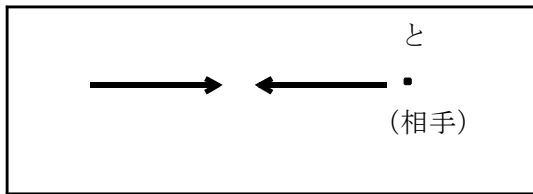


場所「～まで」を使って、方向を表す例

文 例	意味の拡張	「～へ」の意味	コア／派生
家から学校まで バスで行く。	物の空間的な移動の限界	移動の限界	コア的意味
きょうは5ページから10ページまで勉強した。	作業・動作の進行の限界		
月曜日から金曜日まで学校へ行きます。	時間的な経過の限界	時間の限界	
電球からコンピュータまで売っている。	縦覧する範囲の限界	範囲の上限	

(6) 格助詞「～と」のコア

本来異なる存在を合わせて一つにするのが「と」のはたらきと見る。これには、二種類ある。行為の「相手」を表す場合と行為の「連れ」を表す場合である。



次のありさんの歌が、「相手」のわかりやすい例です。

あんまり いそいで
 ごつつんこ
 ありさんと ありさんと
 ごつつんこ
 ——おつかいありさん (関根栄一)

息子は、この4月に、社会人となる。(変化の結果)
 現在の息子 → ← 社会人 (将来の息子)
 社長と会う／話す。(行為の相手)

電話で友だちと 話しました。
 中山さんは、山本さんと 結婚しました。

つぎの文で、相手を表す「と」が、いずれも「に」と置き換え可能であるが、意味がちがってくる。
 娘は、母親と似ていた。[お互いに似ている感じ]
 娘は、母親に似ていた。[娘が一方的に、母親に似ている感じ]
 以下、同様。
 彼と／に恋をした。[相思相愛か片思いか]

私は、彼と／に会う。

曲がり角で、友だちと／にぶつかった。

自転車と／にぶつかった。[お互いに走っている同士でぶつかったのか、止まっている自転車に、一方的にぶつかったのか]

友だちと けんかした。

*友だちに けんかした。

わたしは田中さんと デパートへ行きました。

夏休みに家族と 旅行をしました。

友だちといっしょに中学生とけんかをしました。(=友だちとわたしは中学生とけんかをしました。)
【初級日本語教材から】

[3] 格助詞と英語前置詞のちがい

言葉のコアイメージによる指導法は、英語学習が先行しています。NHK テレビで放映中の「新感覚英文法」がその例です。

 <p>in</p>	<p>「空間内」を表す</p>	 <p>under</p>	<p>「何かの下に」を表す</p>
 <p>on</p>	<p>「接触関係」を表す</p>	 <p>up</p>	<p>「基準から上の方に（移動する、ある）」を表す</p>
 <p>at</p>	<p>「場所（……のところに）を表す</p>	 <p>down</p>	<p>「基準から下の方に（移動する、ある）」を表す</p>
 <p>by</p>	<p>*「近接して」を表す</p>	 <p>out</p>	<p>「（内との対比で）外に」を表す</p>
 <p>to</p>	<p>「対象に向き合って（相対して）」を表す</p>	 <p>off</p>	<p>「（接触の対比で）分離して」を表す</p>
 <p>with</p>	<p>*「何かと共に」を表す</p>	 <p>away</p>	<p>「ある地点から離れている」を表す</p>
 <p>for</p>	<p>*「対象に向かって（を指して）」を表す</p>		
 <p>of</p>	<p>「切っても切れない関係」を表す</p>		

*印の前置詞は、そのコアイメージを、空間的な図のイメージとして描くのが困難な前置詞であり、言葉による説明を主として、図を参考にする。

◇英語前置詞と日本語格助詞のちがい

英語前置詞は、空間関係を表す用語です。大部分の前置詞の意味（核となる意味、プロトタイプの意味）は、空間的な図式で描くことができます。前ページに掲載したのは、NHK テレビ番組「新感覚キーワードで英会話」の2006年12月号テキストに載っていたものです。

ただ、注意せねばならないのは、英語前置詞と、日本語格助詞には、同じ面もあればちがう面もある、ということです。

日本語格助詞の中で、「から」「まで」は、その基本的な意味が、英語前置詞と同じように、空間関係を表すものとみることができます。

「～から」は、「東京から 大阪まで、バスで行った」のような「(場所) から」(＝起点を表す)が基本で、「朝8時から夕方5時まで働いた」のように「(時間) から」(＝時間の起点)や、「食べ過ぎから腹をこわした」のように「(出来事) から」(＝出来事の起点＝原因)は、いずれも「(場所) から」の拡張、と捉えることができます。

ところが、日本語格助詞は、かならずしも、空間関係の表現ではありません。じっさい、最も広く使われる格助詞である「ガ」、「ヲ」は、基本的には、それぞれ動作主や対象を表すものです。[ヲは「鳥が空を 飛ぶ」「公園を 散歩する」のように、場所を表すこともあります]。

また、格助詞の「ニ」は、たしかに、「駅に 着いた」「買い物に 行く」のように、「行為の向かう着点」「行為の向かう着点の意味的拡張としての目的」のように空間表現（およびその拡張）として用いられますが、後述のように、空間関係の表現は、むしろ、「ニ」の用法としては、副次的なものとも見ることができます。

格助詞の「～で」についても、

ホールで お集まりをした。

においては、場所を表していますが、

遠足はバスで 行きます。

のように、「手段」を表すばあい、これを場所の「で」の拡張としてみるのには、かなり抵抗があります。

つまり、日本語の格助詞は、空間関係を表す言葉だと、単純に言えないのです。

もう一つの問題は、日本語表現の曖昧性です。だいたい、空間を表すのに、英語前置詞は、前掲の図をみると、14個あります。空間的ではないby,with,forを除いても11個あります。それに対して、日本語の格助詞で、ガ、ヲ、トを除いて、空間関係を表すものだけ挙げると（ニを加えても）、カラ、マデ、へ、ニ、ヨリの5個しかありません。英語前置詞の半分しかないのです。

「雨に 濡れる木々」において、「雨」は、場所なのか、原因なのか、どちらとも取れます。

英語でしたら

There is a book on the table.

There is fish in the river.

のように前置詞を使い分けて空間関係を明示するのに、日本語では、

机に 本がある。[多分、机の上だろう]

川に 魚がいる。[川の中に決まっている]

と、「ニ」ですませてしまいます。わざわざ「机の上に」「川の中に」と言わなくても、通ずる、とい

うわけです [田中茂範ほか、『英語感覚が身につく実践的指導、大修館書店、』2006]。

◇格助詞「～に」の用法

とくに、格助詞「～に」の使われ方は、多岐にわたり、複雑です。

前章では、「空間的移動の着点」というコアイメージの拡張として示しましたが、以下の「～に」の機能は、何でしょうか。

「友だちに 本をもらう。」

「友だち」は「本」（移動するモノ）の起点であり、かつ、「もらう」（動作）の起点でもあります。

「台風に 家を飛ばされた。」

事実関係は、「台風の力によって、家が飛んだ」つまり

台風→家→家が飛ぶ

という流れです。これを、「家→飛ぶ（家が飛んだ）」ところに焦点を合わせて述べるために、「家が飛ぶ」原因（力の連鎖の起点）を「台風に」と二格で表し、「飛ばされた」という「迷惑の受け身」になっています。

「借金に 苦しんでいる」

借金→私→苦しむ、という流れの起点を「借金に」と表しています。

「私には 富士山が見える」

この「私に」は、見るという「知覚の主体」です。これは、「彼には（所有主） わずかな財産があった」「姉に（能力主）バイオリンが弾けるとは、知らなかった。」「私には（感情主）、そのことがとてもうれしかった。」等と共に「経験の主体」と一括されます。[森山新、格助詞ガの意味構造についての認知言語学的考察、お茶の水女子大学人文科学紀要第57巻]

このような「～に」の用法は、動作主や動作対象等さまざまな意味を持つ文節（語のかたまり、チャンクとも言う）の意味的な繋がり——そしてそのどこを切り取って、どこに焦点を当てるのか——によって決まる、という側面もあるのです。

[4] 格助詞のイメージを作る文例

日本語話者は、小さいときから格助詞のある文を無数に体験して、知らず知らずのうちに、その用法を身につけます。聴覚障害の子どもたちも、そのコミュニケーション方法に適した形で、年齢、興味にあった日本語の歌や短文にくり返し接することによって、格助詞の用法が習得できるのではないか。短く、リズムカルで、印象的な文や歌で、格助詞の使い方がよく出ているものを歌ったり読んだりする機会をたくさん用意することによって、格助詞を感覚的に身につけることができるのではないか。

文例を選択する基準として、格助詞のコア・イメージの形成に役立つような文例、ということがあります。

それは、どのような文例か？

プロトタイプ（典型的なタイプ）のイメージ（「格助詞デ」なら場所を表す用法「富士山の上で おにぎりを食べたいな」）が先ず必要です。なおかつ、派生的なもの（「100人で 食べたいな」）も必

要です。

どんな言葉が、子どもには受け入れやすいか、格助詞の習得に効果的か。現場の経験を交流し合えたらよいと思う。

以下は、たまたま目にした短文、歌で、格助詞の習得に役立つのではないか、という例です。

◇格助詞「に」の文例

老いては子に 従う

れう（良）薬口に 苦し

鬼に 金棒

寝耳に 水

猫に 小判

むま（馬）の耳に 風

やみに 鉄砲

——いろはカルタより

ちょうちょう

ちょうちょう

なのはに とまれ

なのはに あいたら

さくらに とまれ

——蝶蝶（野村秋足）

※「なのはに」は、「飽く」という行為・気持ちが密着する事物、つまり、その「原因・きっかけ」を表す。「山登りに 夢中になる」と同様の表現。

あかりをつけましょ ぼんぼりに

お花をあげましょ 桃の花

——「うれしいひな祭り」サトウハチロー作詞・河村光陽作曲

鳥 なぜ啼くの

鳥は山に

可愛い七つの

子があるからよ

——七つの子（野口雨情）

これくらいの おべんとぼこに

おにぎりおにぎり ちよいとつめて

きざみしょうがに ごまふりかけて

——おべんとうばこのうた（わらべうた）

赤い靴 はいてた 女の子

異人さんに つれられて 行っちゃった
——「赤い靴」野口雨情作詞・本居長世作曲

てるてる坊主 てる坊主
あした天気にしておくれ
——てるてる坊主（浅原鏡村）

きよしこの夜 星は光り
すくい御子（みこ）は 御母（みはは）の胸に
ねむりたもう 夢やすく
——「きよしこのよる」由木康作詞・グルーバー作曲

里の 土産に 何もろた
でんでん太鼓に 笙の笛
——「子守り歌」わらべ歌

※一番目の「に」は、動作・作用と密着した事柄、つまり、その動作・作用の起こる「原因・きっかけ・目的」等を表す。次の「とおoryんせ」の「お祝いに」も同様の表現。二番目「に」は、同じくある事物に密着した事物として、「追加する先」を表す。

この子の七つのおいおいに
お札をおさめにまいます
——「通りゃんせ」（わらべうた）

たなばたさま （権藤はなよ 林柳波）
ささの葉 さらさら
のきばに ゆれる
……

◇格助詞「で」の文例（うた）

大きな栗の木の下で
あなたと わたし
たのしく遊びましょう
大きな栗の木の下で
（「大きな栗の木の下で」平多正於?/阪田寛夫(2・3番)作詞・外国曲）

一年生になったら
一年生になったら
ともだち100人 できるかな
100人で 食べたいな
富士山の上で おにぎりを

パクン パクン パクンと

(「一年生になったら」まど・みちお作詞／山本直純作曲)

夏のことで 思いだしてごらん
あんなことこんなこと あったでしょう
むぎわらぼうしで みんなはだかんぼ
おふねも見たよ 砂山(すなやま)も

——「おもいでアルバム」増子とし作詞・本多鉄磨作曲

お星さま びかり

お話してる

小さな 声で

かわいい 声で

お話 してる

——「お星さま」都築益世作詞・團伊玖磨作曲

十五で 姐やは

嫁に行き

お里のたよりも 絶えはてた

——赤とんぼ(三木露風)

夕焼け小焼けで 日がくれて

山のお寺の 鐘がなる

——夕焼け小焼け(中村雨紅)

あめあめ ふれふれ かあさんが

じゃのめで おむかい うれしいな

——あめふり(北原白秋)

※「じゃのめで」は、たんに「雨を防ぐための手段」と言うより、おむかいの場面全体を規定する背景と考えたい。

◇格助詞「へ」の文例(うた)

めかくし鬼さん 手のなる方へ

——小さい秋みつけた

ゆびに たりない いっすん ぼうし

……

きょうへ はるばる のぼり ゆく

……

さても かえりの きよみず ざかに

おにが いっぴき あらわれ いでて

くって かかれば その くちへ

ほうし たちまち おどり こむ
——いっすんほうし (巖谷小波)

◇格助詞「まで」の文例 (うた)

線路はつづくよ どこまでも
野をこえ 山こえ 谷こえて
はるかな町まで ぼくたちの
たのしい旅の夢 つないでる
(「線路はつづくよどこまでも」佐木敏作詞・アメリカ民謡・吉川和夫編曲)

◇格助詞「より」の文例 (うた)

こいのぼり (文部省唱歌)
やねより たかい
こいのぼり
……

◇格助詞「を」の文例 (うた)

秋の夜長を 鳴き通す
ああおもしろい虫の声
——文部省唱歌 虫の声

一 汽笛一声 (いっせい) 新橋を
はや我 (わが) 汽車は離れたり
愛宕 (あたご) の山に入りのこる
月を旅路の友として
——「鉄道唱歌 (東海道篇)」大和田建樹作詞・多梅稚作

◇格助詞「から」の文例 (うた)

ごはんを もぐもぐもぐ
くちから たべた

おはなし ぺらぺらぺら
くちから でてきた

おみずを こぶこぶこぶ
くちから のんだ

いいうた らんらんらん
くちから でてきた
——ごはんをもぐもぐまど・みちお)

とんぼの めがねは
水いろ めがね
青い おそらを
とんだから とんだから
……

とんぼの めがねは
赤いろ めがね
夕焼け雲を
とんだから とんだから

——とんぼのめがね（額賀誠志）

※「とんだから」の「から」は、格助詞ではないが、起点を表す「から」→原因を表す「から」接続助詞、
という意味的な拡張。

◇格助詞のクイズ

これはジャックの建てた家
（マザーグース 寺山修司訳）

これはジャックの建てた家
でつくったこうじ
を食べたねずみ
を殺した猫
をいじめた犬
を突いたツノまがりの牝牛
の乳をしぼったひとりぼっちの少女
にキスをしたみすぼらしい男
を結婚させた禿の坊さん
を起こした早起きのおんどり
を飼っている麦蒔きの農夫

